

下 又 白 谷 研 究

この研究は、昭和37年から昭和40年まで、当クラブが創立30周年を記念して行った山行の中間発表である。

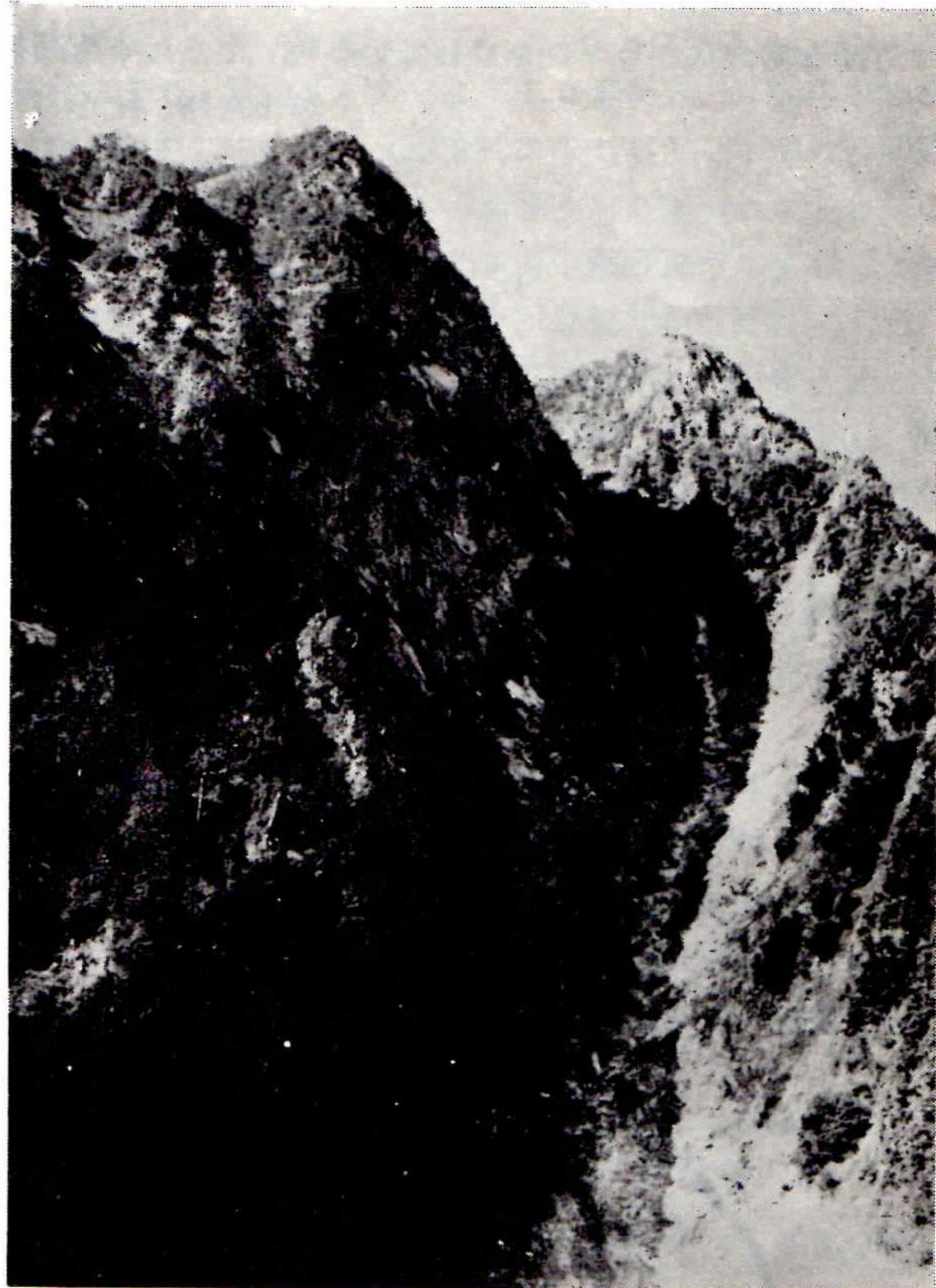
下又白谷は北アルプス前穂高岳、又白谷側にあり、その急峻な事、穂高山群中随一であると思われる。又白谷は前穂高北尾根七峰と前穂高岳から明神岳主峯さらに明神岳東稜にかこまれた一帯の谷を云い、梓川の上流から3本の谷がある。前穂高頂上より東に向って約300メートルの岩壁（東壁）をなし、これは奥又白谷となり梓川に落ちこみ、前穂高A沢の踏替点の“三尺”とその下部に広がる斜面を源に発する中又白谷がある。

下又白谷は北側を奥又第一尾根と、それに続く茶臼尾根に、南側を明神東稜を境にする広大、急峻な谷であり、この谷はその性格上、上部と下部に分けられ、上部は前穂第一尾根の頭から、明神岳主峯の稜線から東に約200メートル落ちこむボロボロの白い岩壁をなし、明神岳主峯の直下約100メートルの白ザレ

から急に、200メートルの大岩壁帯（下又白谷奥壁と新名称）となり、下又白上部雪溪に落ちこんでいる。下又白奥壁は巾が約400メートル、岩質は風化して赤褐色、又は白色を呈している部分と、奥又白に見られる様なかたい快適な岩と半々にミックスされた落石の多い危険な壁である。

下部の壁は上部とは対象的に、岩質においても形状にしても、壁というより巨大な滝の群れであり、それはだいたい4つの部分に分けられ、高度差約400メートルの大障壁となっている。岩はその膨大な水量と雪崩の為テラテラに磨れた凹凸の少ないスラブで非常に硬く滑らかである。

これらの岩壁は今まで登山者の挑戦を完全に拒否し、下部においては見る事も出来ずに、どこにどのような滝があると云う事さえ明らかでなかった。したがってこの登攀史は皆無である訳であるが、これらの滝群が多量の積雪により埋り、アイゼンで登るといふ登攀は可能であり、1933年慈大パーティにより登攀され、又秋山の話によると年月は不明であるが、新村正一氏も積雪期の登攀を単独で行っているとの事である。



茶臼菱形岩壁